

『俘虜記』におけるアイロニー

Michel de BOISSIEU

要旨

In his *Diary of a prisoner of war*, Ooka Shohei depicts the life he lead in an American camp on Leyte Island at the end of the war. The book can be read as a satirical allegory, in which the everyday life in the camp mirrors the evolution of the whole Japanese society under the American occupation, from 1945 to 1952. One of the most conspicuous means of this satire is irony. Ooka does not conceive irony as mere sarcasm, but rather as a combination of twists of meaning, which eventually reveal the gap between a word and the reality to which it is applied. Through the gaps opened by this irony, the contradictions undermining the society appear in full light. The ironical use of a few key words thus becomes the leading thread which lends his coherence to the whole narrative.

キーワード：アイロニー、意味のずれ、矛盾、諷刺、俘虜社会

0. 序論

大岡昇平 (1909-1988) は『俘虜記』(1952)において、自分の俘虜体験を題材にしている。彼は1944年からフィリピンで軍務に付き、1945年1月にアメリカ軍の俘虜となった後、一年間ほどレイテ島の収容所に監禁されたのである。ただし、『俘虜記』の「あとがき」に大岡は「俘虜収容所の事実を藉りて、占領下の社会を諷刺するのが、意図であった」と書いている。

つまり大岡によると、マッカーサのGHQに支配された日本は巨大な収容所であり、占領下の日本人は俘虜と同じような態度を取っていた、ということになる。『俘虜記』はこの時代の日本社会の辛辣な諷刺としていまだに読む価値がある。

『俘虜記』におけるアイロニーの機能を検討するのが本論の目的である。大岡はアイロニーを重要な諷刺の方法として使っている¹⁾。そのアイロニーはただの反語ではない。むしろ意味のずれ、すなわち矛盾、対立の関係などに基づく複雑なアイロニーの連鎖である。つまり、ある言葉と、その言葉が示すはずの事実との間にずれや矛盾が現れることによって、俘虜社会の本質と同時にそのアイロニーとしての戦後日本社会の現実が明

らかになるということである。どのように大岡がアイロニーを具体的に使用しているかということを検討するために、四つの例を取り上げたいと思う。

1. デモクラシイ

第四章「パロの陽」には「デモクラシイ」という観念が出てくる。大岡は俘虜が収容されている病院で発生した食料不足がどのような結果を生んだかを、次のように説明している。

私は年齢と生来の胃弱のお蔭で人よりは苦しまずにすんだようである。新しく隣り合わせた俘虜が飢えているのを見兼ねて、たまには乏しい食料を分ち与える位の余裕を持っていた。彼はそのかわり私のために種々の雑用を足し、蓑を工面してくれたりした。後で収容所へ移ってから、食料が十二分になるまで、私はいつもこういう食料による従卒を一人持っていた。俘虜のデモクラシイの中で私は自然の要求によって支配していた。(109-110頁)²⁾

確かに、大岡がここで「俘虜のデモクラシイ」という表現を使用したことには理由がある。もう戦う兵隊ではなくなった俘虜にとっては、日本軍の階級制はもはやまったく無意味になってしまっている。アメリカ軍に彼らが皆平等に取り扱われるのは当然のことだ。食料は、どの俘虜にも同じ糧が配分されるのである。この意味において、俘虜の社会をデモクラシイの社会と見なしてもさし支えないだろう。

しかし、「デモクラシイ」という観念の意味と、大岡が前述の一節において描写している事実との間には、三つのずれが重なっている。まず、「デモクラシイ」のすぐ後に「支配していた」という表現が出てくる。「デモクラシイ」と「支配」とは、必ずしも矛盾している概念ではない。「デモクラシイ」は民衆による政治的な支配なのである。しかし、俘虜の「デモクラシイ」では支配の基盤が政治にはなく、「自然の要求」にある。それが「デモクラシイ」の本質に矛盾しているのである。俘虜の「デモクラシイ」は「自然の要求」によって支配されている弱肉強食の掟に近いものにすぎない。

また、「デモクラシイ」の社会における人間関係においては「従卒」などいるはずはない。「従卒」は「旧日本軍で、一人の将校に専属でつき従って、その身のまわりの世話をする兵卒」³⁾である。すなわち、「従卒」の存在は旧日本軍の階級制における上下関係を前提としている。軍隊の階級制が無意味になったにもかかわらず、「俘虜のデモクラシイ」の中に「自然の要求」によって一種の「従卒」が現れたのも、こういった「デモクラシイ」のアイロニーであると言えよう。

軍隊では大岡の「年齢と生来の胃弱」がかなり不利な条件となっていた。彼はその「年齢と生来の胃弱」により、将校の階級、すなわち「従卒」が「専属でつき従っている」

階級に昇進する見込みはまったくなかった。ところが、軍隊における不利な条件が俘虜収容所ではかえって利点になり、大岡はそのおかげで特権階級に入ったということになる。これもまた一つのアイロニーを生じさせている。つまり、俘虜の社会では旧日本軍の権力関係が廃止されたわけではなく、屈折されただけである、というアイロニーだ。

大岡はこういった矛盾を見抜くことによって、いくつものアイロニーを発見し、「俘虜のデモクラシイ」の異常な性質を明らかにしている。つまり、「デモクラシイ」の仮面の後ろに、「デモクラシイ」の本質に矛盾する俘虜社会の現実が現れる。「デモクラシイ」における「支配」が歪曲され、「デモクラシイ」と両立するはずのない特権が保存されてしまっている。ただ特権階級に入る基準が転倒させられているだけなのである。

「俘虜のデモクラシイ」の欠陥は、ある意味で当然なことである。なぜかという、そういう「デモクラシイ」が基本にしている「平等」が、もともと少し奇妙だからである。大岡による「平等」の使い方に二重のアイロニーが現れるのもそのためである。大岡は第三章「タクロバンの雨」において、他の俘虜との出会いについてこう書いている。

彼は伍長であり私は一等兵であったが、それを聞いても彼の態度には何の変化も現れなかった。我々が既に俘囚の恥辱によって平等となっていたわけであろうか。(76頁)

ここでのアイロニーはまず、「平等」が一種の不平等に基づくことをあらわにしている。「俘虜のデモクラシイ」の基盤となる「平等」の原因は「恥辱」である。俘虜に共通な「恥辱」の原因は、東条英機が1941年に示達した『戦陣訓』に出てくる、「生きて虜囚の辱を受けず、死して罪過の汚名を残すこと勿れ」という命令にある。つまり俘虜が抱えている恥は戦争に負けた屈辱感よりむしろ、旧日本軍の権力関係の中で命令に背いた意識が生み出した感情である。したがって、大岡のような、もともと旧日本軍を軽蔑しているただの補充兵ならば、それほど強く恥じることはなかつただろう。しかし、職業軍人である下士官なら、話は別である。さらに、彼は部下に対して責任があつたが、その任に耐えなかつた。そのため、「彼の態度には何の変化も現れなかつた」のは当然なことである。彼は自分の行為を恥じるあまり、元部下に対して一種の劣等感を抱いていると言ってもいい。事実、「恥辱」の前で俘虜は平等ではないだろう。この意味で「恥辱」によって成立した関係は、それまでの旧日本軍の階級制全体を転倒させるような、新しい不平等だったのである。

さらに、こういった「恥辱」を基盤とした「平等」にもう一つのずれが現れる。大岡が言った「平等」は俘虜が自分たちの力で獲得したものではなく、アメリカ軍が与えたものである。いいかえれば、俘虜はアメリカ軍の強制した掟の前においてのみ「平等」となつただけだ。こういう受動的な「平等」は決してポジティブな意味を持たないと言えよう。

また、それぞれの個人の政治的な意思に基づいていない「平等」は、その支配力が弱いとも言える。

このような状況が、「平等」と「恥辱」という観念の対立を二重のアイロニーという形で生み出している。そして俘虜の社会における「平等」のずれが、「パロの陽」の段階ではさらに明らかにされることになる。大岡はこう書いている。

やがて各テントに幕長をおき一種の統率を行わしめることとなった。例によってやたらに責任をきめる日本軍隊の考え方であるが、私のテントでは幾人もいる下士官をさしおいて、年長の故をもって私が指定されたのは、幾分俘虜らしい自由主義の現われであったかも知れない。(128頁)

「恥辱による平等」と「デモクラシイにおける、自然な要求によつての支配」と同じように、「俘虜らしい自由主義」という表現は矛盾に満ちている。それはもちろん、俘虜には自由が与えられていないからである。しかし、それだけではない。大岡は前述の一節の真ん中に接続詞「が」をおくことによって、矛盾を強調している。つまり、幕長に選ばれたのは下士官ではなく、一等兵である。この事実には、旧日本軍の階級制に対する俘虜たちの反抗が表れているのかもしれない。しかし、もともと彼らが幕長を必要としたところには、むしろ旧日本軍の精神が屈折した形で生き延びた証拠がある。

さらに、俘虜の「自由主義」がアメリカ軍によって生み出されたと同じように、「自由主義」とは矛盾している日本軍の精神の表出も、アメリカ軍によって許可されているのだ。複数のアイロニーはこういった矛盾から生じてくる。それによって、俘虜の「デモクラシイ」の事実、すなわち俘虜が隷従の状態に陥ったことと、旧日本軍の精神が生き続けていたことが明らかになる。そしてアイロニーは、すぐ後に出てくる一節においてさらに強くなる。

二三日おきに打ち合わせ会と称して配膳所で幕長会議が行われたが、幕長には名目以外大した仕事もないので、従って何の打ち合わせ事項もない。結局会合は配膳係がピンをはねた食糧のお剩りを我々に饗応して、彼等の外郭団体たらしめることにあったらしいが、私は御馳走を大部分テントに持ち帰って、分配し、これが私の幕長としての人気の主な原因をなしていた。しかし配膳係はやがて〈患者が変に思うといけない〉といって私が食糧を持ち帰るのを禁じた。(128-129頁)

この一節の構成も「が」、「しかし」という、対立や逆説の関係を現す接続詞にもとづいている。第一のアイロニーは、「幕長会」できめることが何もないという事実にある。第二に、幕長の態度は彼らが取べき態度とは正反対のものである。患者のために何も

しないだけでなく、患者の権利を侵害することを行っているのだ。その点で大岡の態度は配膳係のそれと同じである。確かに、大岡の気前のよさと配膳係の不誠実は一見全く対照的である。しかし、大岡は患者に「御馳走」を分配することによって、自分の権力を強化するのである。配膳係が「食糧を持ち帰るのを禁じた」のは、食糧のピンはねが明らかになるのを防ぐためではなく、自分たちを脅かすことになるかもしれない大岡の権力を押さえるためである。最後に大岡はこう書いている。

しかし私は忍耐なく支配したわけではない。私は食糧を隣人に分けたのは自然の剰余ではなく、一種の気取りからである。既に私は不断の読書によって俘虜の間で一種「違った」人間になっていた。レイテの傷兵は現役が多く英語を解するものは殆どない。彼等の私を見る眼はまず戦争初期、電車内で横文字の本を読む人を見る衆人の目附に近かった。(110頁)

そして、「自尊心」から彼が「瘦我慢して人に食糧を譲った」と付け加える。この一節はもちろん、前述の「年齢と生来の胃弱」による説明とは矛盾している。「私」の権力の原因は、「自然の要求」の弱さにあるのか、それとも「自尊心」の強さにあるのか、決めかねているところからこの矛盾は生じている。また、こういった「自尊心」の原因は明らかに、「違った」人と見なされたインテリの恥じらいにある。この場合にも、アイロニーは対立と矛盾の関係から生じてくる。

つまり、大岡は自分がパロの病院で見つめた俘虜の社会を記述するために、「平等」、「デモクラシイ」、「自由主義」というような、敗戦後の日本社会において⁴⁾もてはやされ、流行語にもなった観念を使用しているが、それらの通常の意味を連続的なアイロニーによって転倒しているのである。俘虜の社会においては、食糧の支配に基づく新しい権力関係が現れてくる。「デモクラシイ」などの観念はこういった社会の描写には適当ではない。大岡は、アイロニーをもってそのような観念の意味を覆すことによって、俘虜の社会と同時に戦後日本社会をも効果的に批判していると言えるだろう。

第八章「労働」にも「デモクラシイ」の話が出てくる。

こうして自分達のを自分で建てるという仕事の性質から、我々旧日本軍人の間に初めてデモクラシイが生まれた。つまり各小隊共、多忙の口実で中隊本部、炊事場の建造に使役を出すことを拒み、各自その構成員が働くほかはなかった。(243頁)

つまり、住居の建造の時、いわゆる「特権階級」に入った俘虜も一般俘虜と同じように働くことになった。この場合にも「デモクラシイ」という観念が出てくるが、アイロニーは生じてこない。俘虜はその時、初めて本当の平等を経験したからである。ここに

は単にユーモアが立ち上ってくる。こういったユーモアによって、かえって「パロの陽」のアイロニーが強調されていると言えよう。

2. 生きている俘虜

アイロニーは第五章、「生きている俘虜」にも出てくる。大岡は、この題名をつけたことによって、石川達三の有名な『生きている兵隊』¹⁵⁾を想起させている。ただし、章の最初のところにこう書いている。

俘虜は一般に捕えられた兵士であり、ただ祖国へ帰る日を待つて暮していると考えられている。しかし私の見たところによれば、俘虜は「兵士」でもなければ「待つている」わけでもない。(135頁)

大岡はそこで、俘虜が捕えられた兵士であるという一般概念を否定し、俘虜と兵隊を明確に区別している。つまり、「生きている兵隊」は確かに石川達三のルポルタージュでよく知られているが、俘虜にとって「生きている」とは何かという問題はまだ未解決である。大岡はこう書いている。

俘虜も毎日を生きねばならぬ。しかしこういう状態で生きることが、真に生きるといえるであろうか。(136頁)

大岡によれば、「生きている俘虜」には「真に生きる」ことができない。アイロニーはそこで明らかになる。もう少し正確に言えば、「生きている俘虜」を読むと奇妙な事実が現れてくる。即ち、大岡が描写している俘虜はもう兵士ではないが、あたかも兵士であるかのように振る舞っている。アイロニーの原因は、俘虜の生活が基づくこういった矛盾にある。

例えば、今本という俘虜は、捕らえられた時「米兵を彼の聯隊の食料集積所へ案内した」という疑わしい「功績があった」(143頁)。つまり、彼は戦う気があるどころか、むしろ米軍に全く従順であり、模範俘虜であると言ってもいい。ところが、この今本はあたかも俘虜ではないかのように、「日本人收容所長」と称している。そのうえ、ただの上等兵だったにもかかわらず、「曹長を詐称」している。けれども、俘虜收容所では旧日本軍の階級制が無意味になり、新しい社会が現れていたはずである。こういった矛盾こそがアイロニーを生じさせるのである。

同じように、今本は「専制君主」(144頁)を想起させるような「絶大」(p.143)な勢力を持っている。彼は旧日本軍の下士官のように、「絶えず被支配者を怒鳴」ったり、彼らを「監視」したり、自分の「不機嫌」を表したりする(143-144頁)。しかしよく

考えると、「絶大」は適切な言葉ではないだろう。俘虜の社会には、食料の所有に基づく新しい権力関係が現れてくる。そのため、絶対君主を気取る今本さえも、「うまい特別料理を考案して貰うために」、炊事員の「御機嫌を取る」ことになる（160頁）。そのうえ、「本部」には彼のほかに「書記を除き海軍の下士官」（144頁）しかいないという事実も彼の「絶大」な勢力を制限することになる。もちろん、陸軍と海軍の敵対関係が俘虜の社会において生き残ったことも奇妙な事実なのは、いうまでもないことである。すべての俘虜は今本と同じように矛盾にみちている。例えば、今本の書記は

所謂「極秘」の名簿には、各人が降伏したか、捕われたかが記載されているといていた（彼は但し capture はキャプター、surrender はソレンデルと発音した）。しかし米軍が俘虜に降伏と捕獲の区別をつけるはずはなく、ただ彼がこうして一般俘虜を威嚇しようとしているのは明白であった。（146頁）

「戦陣訓」の精神に忠実な兵隊にとっては、降伏と捕獲の区別は確かに重要である。しかし、その精神とは無縁のアメリカ軍が支配している収容所では、俘虜がこういった威嚇にこだわるはずはない。アメリカ軍の観点から見れば、捕獲された俘虜より降伏した俘虜の方がたのもしいのである。旧日本軍の兵隊が俘虜になってから、捕獲と降伏に対する価値判断が転倒させられたが、中川は明らかにそれを理解しなかった。アイロニーはそこで生じ、中川が降伏と捕獲を英語に訳し、間違っただけでさらに強調されている。

また、大岡は点呼の時に不動の姿勢を取る俘虜を描写している。

軍隊にあつて、つまり彼等が「軍人」であつた頃、多数の制服を着た人間がこの姿勢を取る光景には一種の美観があつたが、今や彼等は俘虜であり、各人各様に身に合わぬ服を着ている。しかも彼等は「気を付け」の声で、同じ厳肅端正な姿勢を取るのである。（155頁）

そして、相撲をとっている俘虜について同じようなことを書いている。

この平均して発達した肉体が制服を着て整列するところは壯観であり、軍隊の風呂場の乱雑においてさえなお美しかった。しかし今彼等の肉体は戦闘の義務を解放されて無用となった。この時彼等の鍛錬された肉体も、スポーツの肉体と同じ無償な奇形しか示していないのである。（179頁）

ここで今本と中川の行動に現れた矛盾が明らかに表現されている。大岡は、「俘虜」

と「軍人」を対立させることによって、前者がいかに不思議な状態に陥ったかを示している。つまりアイロニーは、もう兵士ではない俘虜が兵士のように体を鍛えたり、整列したりすることから生じてくる。

こういった矛盾が生み出すアイロニーは滑稽な描写の形を取ることもある。例えば、収容所に現れた新しい権力関係が旧日本軍のそれを想起させるが、俘虜の社会と旧日本軍との間には大きな違いがあるのはいうまでもない。したがって、今本たちは軍人よりも、ただの「市民社会のどこにでもいる最も平凡な悪党」（146頁）を思い出させる。いわゆる「棟長」の生活は「たまに棟に入って親分風を吹かし、本部にあっては互いにその特権を論じて悦に入ることに尽きていた」（147頁）。今本も「単純な親分的統率の才を具えていたようである」（143頁）。

つまり、大岡は俘虜の特権階級を「やくざ」と同じと見なしている。ここで「親分」が「やくざ」を意味するのは、当時の読者にとって当たり前のことだったと思われる。戦後の日本社会において、やくざは前代未聞の繁栄を経験し、話題になっていた。ジョン・ダワーが書いているように

1945年10月までに、全国の大都市を中心に、推計一万七千の野外市場が生まれた... やがて整理淘汰がおこなわれたが、ときに手荒い方法が使われ、そうした場合はマフィアのゴッドファーザーのような親分に率いられたやくざ組が登場することが多かった。⁶⁾

また、アメリカ人のように本部の今本と織田を「イマモロ」、「オラ」と呼んでいる。名前を歪曲することによって、イマモロとオラが結局アメリカ軍の追従者にすぎないことを明らかにしている。こうした滑稽さが彼らの性格描写によって強調されている。オラは「軍人の謹厳とともに月給取の慇懃もかね具えていた。そして彼が収容所で発揮していたのは主としてこの後の方の才能であった」（145頁）。中川は「単純な阿諛者であるが、前述によって読者が容易に推察されるように、イマモロは阿諛に弱かった」（146頁）。性格描写だけではなく、風貌描写も戯画化されている。例えばイマモロの「顔の皮膚は厚く、意外なところに意外な皺が寄っていた。顔は四角く少々反歯、足は短くガニ股であった」（143頁）。

大岡はこのように、「生きている俘虜」を喜劇の登場人物としていると言ってもいい。しかし、矛盾に基づく彼らの生活は結局、滑稽というよりも不条理であろう。大岡はこう書いている。

夕方の点呼の後は自由な時間である。日中も所内諸施設のほぼ完備したこの頃は、便所掃除塵芥捨て等、日々の小作業のほかさして仕事はなかったが、とにかく日夕

点呼後の時間というものは、軍隊からの習慣で、兵士にとって格別にゆったりした気分のものである。(159-160頁)

もう「兵士」ではない、つまり一日中することがほとんどない俘虜が、点呼の後の時間を「自由な時間」と呼ぶのは無意味なこと、あるいは論理矛盾であろう。点呼の前の時間も「自由」と呼んでもいいのである。ところが、このような状態においては「自由」という概念も無意味になる。大岡が書いているように、「俘虜の生活など無意味な行為に充ちているものである」(168頁)。言い換えれば、俘虜にとって「自由」とは「退屈」にほかならない。「生きている俘虜」はただ「何もしないで時を過ごすことに馴れた人種である」(178頁)。この定義で俘虜の生活の無意味さが明らかにされている。ところが、この規則に反する例外が出てくる。

炊事員達である。彼等は収容所中で確実に一日を働いた唯一の人達であり、なすべきことをなし遂げたという満足、他人のためになることをしたという自信は、その顔を輝かせている。(160頁)

炊事員の生活には意味がある。彼らは、一般俘虜のように虚脱に近い状態に陥るどころか、ますます「元気澁澁」(160頁)となる。その生活との対照によって、一般俘虜の生活の無意味さが一層顕著となる。

大岡は「生きている俘虜」の最後のところで、最初に出てきた問いを繰り返し、俘虜は「人間であろうか」(181頁)という疑問を付け加える。それによってアイロニーはさらに強調されている。つまり、俘虜の「デモクラシイ」がデモクラシイのまがい物にすぎないと同じように、「生きている俘虜」は生きている「人間」のまがい物であると言ってもいい。そこでアイロニーによって明らかにされたのは、人間のアイデンティティーの問題である。

石川達三のルポルタージュに出てくる兵隊、すなわち急に殺し屋に変えられた一般市民も、本当の自分に対して疑念を抱いている。彼等は、体験している極端な状態を耐えるために、自分の感情を抑圧したり、自分の思い出を削除したりしなければならない。こういった不自然な行為がもたらす心理的な苦痛の結果、多くの場合には「自分」の輪郭がぼけてしまう。

大岡の俘虜は、兵士から俘虜へというもう一つの転換を体験したため、本当の自分を完全に失ったと言えよう。彼等は戦場と収容所の体験によって与えられた心的外傷を乗り越えることができない。その意味で、大岡が記述した俘虜生活は、人格解離というような精神障害を研究する学者にとっても興味深いのであろう。一方、大岡はその記述によって、カフカの『変身』を想起させるような雰囲気を生み出し、読者を悪夢のような

世界に導く。こういった不条理の文学の魅力も『俘虜記』にはある。

3. 戦友

第六章「戦友」の段階では、「生きている俘虜」をめぐるアイロニーがさらに顕著になる。大岡はそこでミンドロ島で軍務についた俘虜、つまり自分の「戦友」を描写している。「戦友」とは戦後の日本社会において、特別な感情を覚えさせる表現、すなわち愛他主義や犠牲的精神を想起させる表現なのであった。鮎川信夫は1946年に刊行された『戦中手記』に、兵隊は「戦友に対する熱烈な肉親感を、絶えず食いながら生きている」⁷⁾と書いている。兵隊は自分の命よりも「戦友」のそれを大切にせずだからである。

ところが、大岡が描写している「戦友」の共通点は、犠牲的精神であるどころかむしろ「市民的エゴイズム」(204頁)である。例えば、小隊長の山田少尉は、「豪放をてらっていたが、内心頗る怖れて」おり(183頁)、結局自分の命を唯一の気がかりの種としていた。神楽という若い兵士の要領は、「上官に阿諛し同僚を無視することにあつた」(185頁)。池谷という補充兵は「駐屯中民家へ入って饗応を受けるのを好んで、比島人から嫌われ僚友からも疎んじられていた」(187頁)。また、戦前「算盤によって身をたてた」他の若い兵士が、上官を操ったり、「僚友の告げ口を」したりすることによって「軍隊でも成功」(195頁)した、ということになる。いうまでもなく、大岡の「戦友」は僚友に対する「熱烈な肉親感」を抱かない。部隊における人間関係は、むしろ嘘と詐欺に基づいていると言えるだろう。

最後のところに「戦友」という表現が初めて出てくる。大岡はこう書いている。

我々は悉く十九年初三カ月の教育を経て前線に送られた所謂「おっさん部隊」であり、まず兵士とはいえなかった。米軍がレイテの次に上陸したこの島で我々の迎った運命は惨めであつたけれど、それは戦闘とはいえなかった。それは我々の市民的エゴイズムを粉碎するに到らなかつた。我々は戦友ではなかつた。(203-204頁)

ここで、「戦友」という題名に強いアイロニーが含まれていることが明らかにされている。「兵士」、「戦闘」、「戦友」という言葉の空虚さが明らかにされ、その背後に隠されていたそれぞれの事実、つまり「おっさん」、「惨めな運命」、「市民的エゴイズム」が見えてくる。ところが、この空虚な言葉は、戦争をめぐるすべての物語の基本的な語彙である。すなわち、ここで大岡がアイロニーによって問題化しているのは戦争を物語ることそれ自体である。アイロニーはこういった反語に限られていないのである。「戦友」という表現をめぐる嘘は、俘虜たちが収容所で捏造する嘘、つまり作り話に関連がある。彼らはどう捕まったかということについて嘘を語るのである。「名誉心の制約を持つ日本の俘虜は、無論収容所で投降を自白した者はいない」(188頁)。しかし、帰還後真実

を語った俘虜もいる。嘘と真実を比べると、俘虜がしばしば「嘘に基だ危険な真実を交えていた」(188頁)ことが明らかになる。いうまでもなく、この事実もアイロニーを生み出す。

例えば或るレイテの俘虜が収容所で語ったところによれば、彼は「えい、どうとでもなれと思って、国道へ上ってぼかぼか歩いているとゲリラが馬車で来て捕えられた」のであった、帰還後彼の語った真実は、「前から投降の決意を固めていて、そのためにわざと落伍し、森に隠れて、国道を戦闘部隊でない米軍が通るのを待っていた。そしてジープの前へ手を挙げて現れた」のであった。この二つの話に共通しているのは「国道」である。(189頁)

「戦友」の神話と同じように、俘虜の作り話も嘘がばれてしまう。そのことによって、「生きている俘虜」に出てきたアイロニーの効果もいっそう深くなる。第五章の段階で、もう兵士ではない俘虜が兵士のように振る舞っているという矛盾が不条理を生み出した。ところが、こういった俘虜のなかに、もともと兵士ではなかった人もいたのであれば、事実は一層不条理になるであろう。

ここで注意すべきなのは大岡の記述法である。彼は各「戦友」の戦前、戦中、戦後を丁寧に語るにもかかわらず、彼らの「行為には、必ずしも心理的連続性を求めなくてもいい」(189-190頁)と書いている。例えば、戦中「虚栄心」と「責任回避の下心」を持っていた山田少尉は、「帰国後死んだ部下の家を克明に歴訪して、中退から還った唯一の将校としての務めは十分果たしていたようである」(184頁)。このような記述は確かに「生きている俘虜」に出てきた不条理の問題に関連がある。自分の俘虜生活を「天国」や「わが生涯の最良の年」(204頁)と言っている者がいることも、同じ問題に絡んでいる。「PXを享受する」俘虜が入った消費社会の「天国」は、同時に「退屈」と虚脱の地獄なのである。俘虜生活に現れたこの矛盾が第八章、「労働」にも出てくる。

4. 労働

「労働」という章の題名自体にアイロニーが含まれていると言えよう。日本語大辞典によれば、労働とは「人間がその生存に必要な物資を得るために、労働対象にはたらきかける」ことである。確かに、俘虜は収容所についた時、自分の「宿舍たるべきニッパ小屋初め各種施設を建設」(239頁)しなければならなかった。自分自身に必要な住居を得るために、「毎日みな力の極限まで働いたのである」(243頁)と大岡は書いている。しかし、小屋の建設が終わった後、収容所では「完全にすることが」なくなった(285頁)。その時から俘虜に与えられている「労働」は、「荷役又は梱包の積み替え」(259頁)というような「名目的なもの」(242頁)、つまりアメリカ人が「無理に案出した」(259頁)

外業でしかない。

「労働」の唯一の目的は、俘虜が「時間を潰すこと」になってしまう。暇つぶしとなった「労働」は、無意味である。したがって、俘虜は退屈なので、「当然遊ばねばならぬわけである」(260頁)。ところが、「労働」が意味を失うなら、遊びも無意味になり、退屈な暇つぶしにすぎない。結局、俘虜の生活が完全に八方ふさがりに陥ってしまうことになる。アイロニーの原因が、「労働」も遊びも暇つぶし、つまり見せかけに変わることにあると言ってもいい。

アイロニーは「労働」のすべての面に現れる。例えば、大岡は「若干の労働貴族が生じた。大工と画工である」(258頁)と書いている。なぜかという、「この二種が俘虜の米軍に重宝がられる特殊技能のすべてであった」(259頁)からである。確かに、大工と画工は唯一、本当に働く俘虜であり、その意味で労働貴族であると言ってもいい。彼らがいい給料をもらうのも当然なことであろう。

しかし、「労働貴族」がマルクス・レーニン主義の概念の一つであることを忘れてはいけない。レーニンによると「労働貴族」は「大衆から切り離された高級労働者」であり、つまり「資本主義のもとでかなり〈うまい暮らし〉をして、あじ豆のあつものとひきかえに自己の長子権を売り渡す、すなわち、ブルジョアジーに反対する人民の革命的指導者たる役割を放棄するような」⁸⁾ものだ。大岡がいう収容所の「労働貴族」は、俘虜の「生存に必要な物資を得るために」働くわけではない。ただ米兵の気晴らしと安楽な暮らしに必要なものを作っている。こういった「労働」はもちろん、阿諛の一種である。従って、収容所に現れた貴族がいわば権力の取り巻きにすぎないというアイロニーが生じてくる。

その上、いい給料をもらうのは大工と画工だけではない。一般俘虜にも「豊かな食料とPX」があるのである。つまり、俘虜が「支払われすぎている」(292頁)ということになる。ここに、「戦友」の段階で述べられた俘虜の消費社会のテーマがまた出てくる。ところが、大岡は賭博や盗みのような暇つぶしがもたらした「墮落」(290頁)を述べることによって、アイロニーをさらに強調している。「生きている俘虜」ですでに問題化された人間の条件が再考されてくるのである。大岡は賭博などにふける親分たちについて、「彼等は生きている」(288頁)と書いている。

つまり、唯一の「生きている俘虜」は、よく墮落した俘虜である。この矛盾を可能にした文明、即ち収容所を支配するアメリカ人の「デモクラシイ」もここで問題となる。大岡は或る日収容所で黒人を三人見たが、「彼等が俯向いて黙々と働く様子は、米兵の自由闊達な態度と著しい対照を示している。これはやはり奴隷であった」(284頁)という気がした。アメリカの黒人が俘虜と同じように虚脱に陥っていることに辛辣なアイロニーが含まれている。俘虜に「デモクラシイ」を強制したアメリカ人にとって、「デモクラシイ」と人種差別が矛盾していないということが明らかになる。しかし、こうい

う「デモクラシイ」は本当の「デモクラシイ」とは言えないだろう。

5. 結論

『俘虜記』においてはアイロニーによる俘虜社会に対する批判が、以上考察したように「パロの陽」、「生きている俘虜」、「戦友」、「労働」を通じて展開する。そのことによってアイロニーの連鎖はますます複雑になっていく。例えば、第五章の「生きている俘虜」に対するアイロニーの意味は、第六章の「戦友」と第八章の働いている俘虜に対するアイロニーで強化されていた。

『俘虜記』全体の読み方について、最後に重要な注意をする必要がある。それは、もともとすべての章が別々に異なる雑誌に発表されていたが、しかし、各章は互いに有機的な関係をもっているということである⁹⁾。読者は「戦友」を読まないで、前の章、「生きている俘虜」のアイロニーが完全に理解できるものにならない。逆に、戦友に対するアイロニーが出てくると、読者は前の章を再読したくなる。このように、『俘虜記』全体の読み方は一種の往復運動を必要としている。つまり大岡のアイロニーは、誰でもよく知っているはずの観念の意味と使い方について再考させるのみならず、『俘虜記』のテキスト全体の構成においても、そのテキストの読書行為にとっても、重要な役割を演じているのである。

ここで、『俘虜記』における言葉遣いそのものが問題となる。大岡はもともと、スタンダールを自分の文学的理想としていた。大岡によると、スタンダールの小説において「一つの言葉は厳密に一つの対照しか」指示しない。中野孝次は『絶対零度の文学』¹⁰⁾で、同じことが大岡の文学にもあてはまると指摘した。そして埴谷雄高も大江健三郎と菅野昭正との鼎談「大岡文学を語る」において、大岡が「スタンダールをちゃんと自分の血肉化」したとし、「漢語をかなり使っているけど、明晰な日本語になっている」といっている¹¹⁾。

しかし、『俘虜記』における言葉の特徴は、むしろ多義性にある。例えば、八章では「墮落」という観念がよく出てきた。この観念は、坂口安吾の『墮落論』が刊行されてから戦後社会で流行していた¹²⁾。安吾によると、戦争が終わってから、「人間は墮落する」¹³⁾。しかし、「戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ」。また、墮落こそ人間性であり、「そのこと以外の中に人間を救う便利な近道はない」。すなわち、安吾は「墮落」に対する通常の価値判断を転倒させ、普段軽蔑的に使用される概念をいい意味で解釈している。ところが、大岡は安吾の屈折した論理をさらに屈折させ、一種の二重アイロニーとして、「墮落」を否定的な意味で使用している。その意味は文脈によって少しずつ違う。大岡は「季節」の章で自分の「文土的墮落」(217頁)を、シナリオや春本のような大衆文学を書いてきたことに見いだしている。「墮落」はここでは、「俗世の人のような悪意な考えに染まること」

という仏教語に近い意味をもっている。その使い方はユーモアに満ちている。一方、第八章「労働」では、怠ける俘虜の「墮落」(293頁)の原因が何度も問題とされている。それは俘虜が労働の対価を与えられすぎているからである。単純な労働の代償として与えられるものが、「俘虜の生産生活とは釣り合っていない」(293頁)のである。その場合の「墮落」は「正しい生活が出来なくなる」という、もう少し強い意味をもっている。

「演芸大会」の章は「やがて俘虜は急速に墮落し始めた」(351頁)という文から始まる。ここの「墮落」には前章とは別のニュアンスが付されている。『俘虜記』に影響を与えたドストエフスキイの『死者の家の記録』においても、演芸大会に関する有名な章がある¹⁴⁾。ドストエフスキイの囚人は戯曲を上演することで、失った自尊心を取り戻し、人間としての存在感を久しぶりに抱くようになる。大岡は演芸大会を「墮落」と結びつけることで、ドストエフスキイの楽観的な記述をひっくり返している。これによって演芸大会後のレイテの俘虜は、ある意味でもう人間とは言えない、ということを明らかにするのである。つまり、「季節」に初めて出てくる「墮落」という観念の意味が次第に強められ、「季節」で暗示された事実が明らかにされる「演芸大会」で最高の段階に達することになる。アレゴリーの展開における言葉の強度の増幅が観念のくりかえしと意味のずれによって支えられているのである。また、『俘虜記』の特徴は、こういったテクスト全体の運動となっているアイロニーの連鎖によって支えられたアレゴリーにあるといえよう。

註

- 1) 野田康文『大岡昇平の創作方法』(笠間書院、2006) 37-42頁参照。
- 2) 『俘虜記』の引用は、新潮文庫版(1977)による。
- 3) すべての定義は、『日本国語大辞典』第二版(小学館、2000)による。
- 4) ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』(岩波書店、2001) 上巻 第七章参照。
- 5) 石川達三『生きていた兵隊』(中央文庫、1999)
- 6) ジョン・ダワー、前掲書、170頁
- 7) 『鮎川信夫全集』(思潮社、1995) 第二巻 498頁
- 8) レーニン『国家と革命』(岩波文庫、1957) 42-43頁
- 9) 平岡敏夫『『俘虜記』——作品全体の統一的評価を求めて——』『国文学』(1977.3) 参照。
- 10) 中野孝次『絶対零度の文学』(集英社、1976) 18-19頁
- 11) 『飛躍と浸潤』植谷雄高対話集(未来社、1996) 136-137頁
- 12) ジョン・ダワー、前掲書、189-191頁参照。
- 13) 坂口安吾『墮落論』(新潮文庫、2000) 85頁
- 14) ドストエフスキイ『死者の家の記録』(新潮文庫、1956) 上巻、第十一章参照。